

平成 25 年 8 月

パーキンソン病

神経内科の領域で「手のふるえ」の原因としてよく見かけるのがパーキンソン病です。この病気は脳の中にある「ドーパミン」という物質が減ってしまい、その結果、脳が出す運動の指令がうまく手足の筋肉に伝わらず、スムーズに動けなくなってしまうのです。そうなりますと手が使いにくくなったり、歩きにくくなったりして日常生活に大きな支障を来たします。

パーキンソン病は四十歳以後、特に五十～六十歳代に症状が出はじめまして、典型的なケースでは手足のふるえをはじめ、筋肉のこわばり、動きのにぶさ、転びやすさなどの症状がみられます。これらの症状は上手に治療薬を選択することにより、比較的簡単に改善させることができます。しかし、残念ながら完治する病気ではありません。症状は年齢とともに進行するのが普通です。

わが国の患者数は人口十万人につき八十～百人くらいとされ、決して珍しい病気ではありません。発病するのは五十～六十歳代が多いのですが、二十歳代～八十歳近くまで、実に幅広い年齢で発病します。ちなみに男女差はありません。ここで、もう少し詳しく症状をお話することにいたしましょう。

- ① 手足のふるえ 安静にしている時に自然にふるえるのが特徴で、ふるえに注意したり、動作をおこすと止まります。片方の手足から始まって反対側に広がるのが特徴です。
- ② 筋肉のこわばり 筋肉が硬くなるため、患者さんの関節を伸ばそうとしたり、曲げようとするすると筋肉の抵抗を感じます。
- ③ 動きがにぶい 何かをやろうとしても、動き出すまでに時間がかかり、動作全体も遅くなります。また、表情が乏しくなりまばたきが少なくなります。時に歩きだそうするとき、はじめの第一歩がなかなか踏み出せません（すくみ足）。
- ④ その他の症状 姿勢を一定に保つことが難しい、便秘、立ちくらみを起こしやすくなる、トイレが近くなる、気分が沈みがちになる、といった症状も見られます。

パーキンソン病は厚生労働省の「特定疾患」に指定されていまして、症状が進行したケースに限り申請すれば、治療費の補助が受けられます。

また、パーキンソン病によく似た症状をきたす、パーキンソン症候群というものがあります。代表的には脳卒中の後遺症、内服薬の副作用からくるものがあり、問診や精密検査をおこなって確実に診断をつけなくてははいけません。手足のふるえが気になる方はお気軽に外来でご相談ください。最近では効果の良い、副作用の少ない新薬が出ています。 (文・神経内科 則行 英樹)